

# 専修寺蔵『入出二門偈頌』建長八年真佛写本の訓点について

佐々木 勇

## 〇、本稿の目的

三重県津市真宗高田派本山専修寺に、高田派二世真佛（一二〇九—一二五八）書写『入出二門偈頌』が現存する。その全頁写真が『影印高田古典』第一巻（真宗高田派教学院、一九九六年）に収められ、公刊されている。この写真複製によって、原本の全貌が知られるようになったことは、誠に喜ばしい。

本稿の筆者は幸いにして、本山専修寺にて右の原本を閲覧する機会を与えられ、全体のカラー写真を借覧することも許された<sup>1)</sup>。本稿では、この幸運を活かし、『影印高田古典』の写真では判読しづらい、本資料の朱筆訓点の内容について考察した結果を記す。

なお、本資料の朱筆訓点について述べるにあたり、本文・墨訓点についても本稿筆者の見解を記すべきであると考えするため、以下、順に述べる。

## 一、本資料の本文

### 1. 墨書

本資料の本文書写者が真佛であることは、平松令三が最初に指摘した<sup>2)</sup>。

専修寺所蔵の古写本を、長年に亘って多数見続けてきた平松の判断であり、尊重されるべきであろう。本資料墨書本文は、『影印高田古典』第一巻所収の他の真佛書写本と同筆である、と筆者にも思われる。

また、梅林久高「入出二門偈頌の諸本と聖人の新訳採用」（『高田学報』第七十七輯、一九八八年十二月）は、本資料奥書「建長八歳丙辰三月廿三日書写之」も本文と同筆である、とする。本稿の筆者も、そのように考える。

この真佛の書写は、親鸞自筆原本に忠実であり、親鸞の欠筆をも反映することは、右先行研究に指摘されるとおりである。

その他、「惱」の旁下部分をメの如く上書き訂正している点も、注目される。この訂正は、本資料「惱」字のすべてに及ぶ（四ウ5・五才3・六ウ1・六ウ2・八ウ5）。親鸞の字形には、「惱」の最後の部分が「田」のようにも見えるものが存するためその通りに写したものを、後に統一的に訂正したものと思われる。

なお、擦り消し重書によって、「支」に訂正している箇所がある（一才2）。当該字は、巻頭『無量壽経論』の訳者「菩提留支」

の「支」であり、何故訂正が必要であったのか疑問である。擦り消し部分から推測するに、訂正前は「友」のように見えたであろう。この、「支」を「友」の如くに書くのも、親鸞の字形である。その親鸞の字形を、真佛が正確に写したものを、後にまごう事なき「支」に修正したものではなかるうか<sup>(3)</sup>。

これらの点から、本資料本文は、親鸞の字形そのままに、真佛が書写したものと考えられる。

## 2. 朱書

前引梅林論文は、本文と奥書との間に書かれた「入出二門」の朱筆は、「異筆のようである。」とされる<sup>(4)</sup>。



この朱は、仮名・声点の朱よりやや橙がかっており、本稿の筆者も、「入出二門」の朱筆は本文と別筆である、と判断する。

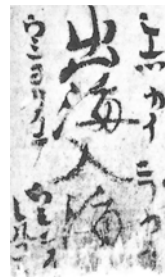
この朱筆「入出二門」は、墨の奥書が書かれた後、挿入されたものである。朱筆「入出二門」の「出」は、墨の奥書「建長八歳丙辰三月廿三日書写之」の「歳」に重書されている。朱筆「出」が上になっていることは、原本によって確認される。

平松令三は、この朱筆「入出二門」が親鸞自筆であると推定している<sup>(5)</sup>。

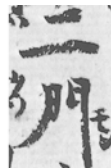
「入出二門」の四字のみから筆者を推定するのは、困難である。しかし、を試みるために、建長八年と同時期の親鸞自筆『西

方指南抄』から、「入」「出」「二」「門」の漢字を、左に複写してみる。『西方指南抄』の所在は、『親鸞聖人真蹟集成』第五卷・第六巻通しの頁数と行数とで示す。以下、同じ。）

『西方指南抄』（二一六）



『西方指南抄』（七〇九四）



右に掲げた例は、特別に選んだものではない。他例も、複製本で確認いただきたい。

『入出二門偈頌』朱筆「入出二門」の「出」は、某字（「空」カ）に重ね書きしたため、不自然な字形となっており、親鸞筆『西方指南抄』の字形とは異なるものの、同筆であると見られる。親鸞筆である、との断定は難しい。しかし、親鸞筆ではないとする根拠を挙げることもまた困難である。

当時、真佛筆の本文に朱を入れることができた人物が、親鸞以外に居たとは考えがたい。よって、本文と朱筆「入出二門」とが別筆であることが認められたならば、平松の推定通り、巻末朱筆「入出二門」は、親鸞筆と見るのが穏当であろう。

## 二、本資料の訓点

『影印高田古典』第一巻の新光晴解説は、専修寺蔵『入出二門偈頌』が真佛書写であることを前提に、訓点に関して、次の二点を指摘している。(要約して記す。)

○振り仮名や送り仮名の片仮名字体も、親鸞使用の古い字体が用いられている。

○声点は朱筆で、「○」「一」「〇」「●」を使用している。

以下、墨点と朱点とに分けて、本資料訓点における仮名と声点とについて検討する。

### 1. 墨点

#### ① 仮名

墨点の仮名は、本文を訓読している。訓読中の字音語には、漢字右側に、仮名で音を加点する。ただし、「訛<sup>アヤマレルナリ</sup>」の左に「クワ反」として音を加点する如き例も存する。

#### ② 返点

訓読の補助として、「一・二・三・四」「上・中・下」の返点を、墨で加えている。このうち、「三・四」が親鸞時代の古体であることが、右引先行研究に指摘されている。

#### ③ 声点

本資料中、墨点の声点は無い。

### 2. 朱点

#### ① 仮名

朱の仮名は、第一丁表にのみ見られる。「无量壽経論一卷」<sup>クワン</sup>「元

魏天竺三藏<sup>デシチクサムサウ</sup>「菩提留支譯<sup>ホタイレンシノ</sup>」がそのすべてである。墨点が訓読せずにいたこの箇所を読み、朱点<sup>②</sup>が補っているように見られる。

#### ② 返点

偈本文の朱点は、七字を一句とする偈文を、音で通読している。そのため、朱点には返点が無い。

#### ③ 声点

朱で、「●」「一」「〇」「●」の声点が加点されている。ただし、「●」は一例のみである。「〇」加点の際に、○がつぶれたものであるうと思われるため、以下、「〇」として扱う。

この声点は、入声音に急・緩を区別する、親鸞使用の声点形式である。

### 3. 墨点と朱点との関係

本資料訓点には、訓読を示した墨点の上に、字音直読の朱点が加点されている箇所が存する。具体的には、次の例などである。

- |       |                                      |
|-------|--------------------------------------|
| 二ウ2行目 | 「覺」の入声点は、墨点「ノ」に被さっている。               |
| 二ウ3行目 | 「別」の入声点は、墨点「ノ」に被さっている。               |
| 二ウ5行目 | 「足」の入声点は、墨点「シ」に被さっている。               |
| 二ウ5行目 | 「德」の入声点は、墨点「ノ」に被さっている。               |
| 四才4行目 | 「察」の入声点は、墨点「ス」に被さっている。               |
| 六才3行目 | 「宜」の上声点は、墨点の返点 <sup>②</sup> に被さっている。 |
| 七才4行目 | 「獲」の入声点は、墨点「キ」に被さっている。               |
| 七才5行目 | 「則」の入声点は、墨点「チ」に被さっている。               |
| 七ウ1行目 | 「濁」の入声点は、墨点「ナリ」に被さっている。              |
| 七ウ3行目 | 「濁」の入声点は、墨点「ク」に被さっている。               |

八ウ4行目 「實」の入声点は、墨点「ノ」に被さっている。よって、まず墨点による訓読の訓点が付点され、その後、朱点による字音直読の仮名および声点が付点されたものと見られる。

### 三、朱点の加點者

複製本によっても知られる通り、朱筆の仮名は、鎌倉時代初期の字体である。

本資料朱仮名・朱声点の朱色は、巻末「入出二門」の朱色と異なることは、すでに述べた。

以下、朱訓点の内容を検討することで、朱訓点加點者を推定したい。

#### 1. 仮名

本資料に加點された朱の仮名は、ごくわずかである。

その全ての朱筆仮名の字形と、親鸞筆『西方指南抄』の仮名字形および本資料墨筆の仮名字形とを比較してみる。左に複製本の所在掲げる。ご確認願いたい。

『入出二門偈頌』朱筆 『入出二門偈頌』墨筆

卷 クワン 『西方指南抄』 元 クワン (一才2)

天竺 テンシク 天竺 (二二三) テ (表紙見返2)

ン (表紙見返1)

チ (七ウ3)

ク (一才2)

三藏 (表紙見返1)

三藏 サムサウ  
ホ ホ 菩提留支 ホ

三藏 (一八七3)  
ホ ホ 菩提流支 (二八七1)

ホ (表紙見返4)

タ (表紙見返2)

イ (表紙見返2)

ル (表紙見返4)

シ (表紙見返4)

ノ (表紙見返1)

本資料朱仮名の全体数が少なく、親鸞自筆か否かの判断はできない。

しかし、『入出二門偈頌』朱筆仮名は、『西方指南抄』の仮名と比較して筆勢が弱く、鋭さに欠けるように見られる。真佛は、親鸞と極めてよく似た字を書くことで知られることもあり、断定できないものの、本資料の墨筆仮名と朱筆仮名とが異なる印象を受けるのは、筆を変えたためであろうと思われる。

#### 2. 声点

##### A. 声点の形式

本資料の声点は、「●」「一」「○」の四種であった。この四種とも加點されるのは入声のみである。平上去声では、「●」を清、「一」を濁として使用している。

入声では、「●」を「清急」、「一」を「濁急」、「○」を「清緩」、「○」を「濁緩」とする。「急」は舌内入声音と促音、「緩」は喉内・唇内入声音に加點されている<sup>6)</sup>。

この声点体系は、親鸞が声点図に記すものの、実際の加點において、本資料の如く厳密に使用している資料が指摘されていない。『觀無量壽經・阿彌陀經』では、入声の濁緩に「一」を用いており、坂東本『教行信証』は「○」「●」「一」「○」「○」「○」の

すべてが用いられている<sup>7)</sup>。

その「○」形式の声点では、○は、右斜め下の直線と半円とを併せて、二画で書かれる。これは、『浄土論註』巻末親鸞自筆鸞伝加声点に判然と見られる書き方である。

一方、真佛の声点は、『皇太子聖德奉讃』(『影印高田古典』第一巻所収) および直弟本『西方指南抄』(『影印高田古典』第五巻・第六巻所収) に加声された墨声点がそれであろう。真佛は、声点の円を一筆で書いている<sup>8)</sup>。

さらに、親鸞自筆の「一」は、全体に細く均一であるか、終画の方が太い。これに対して、『入出二門偈頌』の「一」は、入筆部が太い。

また、親鸞の「●」は、小さな円形である。ところが、『入出二門偈頌』の「●」は入筆の穂先を残す水滴形である。

以上、声点の形から、本資料声点は、親鸞加声点を正確に移点したものであるが、親鸞自筆ではなからうと思われる。

## B. 声点の内容

ここで、『入出二門偈頌』の入声点が、西本願寺蔵『観無量寿経註・阿弥陀経註』および坂東本『教行信証』と同様のものか否かを、声点の内容を分析することによって確認したい。

ここでは、坂東本『教行信証』と比べて例外が少ない、西本願寺蔵『観無量寿経註・阿弥陀経註』の入声点の実態を示す<sup>9)</sup>。

① 西本願寺蔵『観無量寿経註・阿弥陀経註』の入声点  
左の表1は、句末か句末以外かを、親鸞加声の句切り点に依って判定し、入声点の延べ数を記した表である。句末以外の例は、

後続字の頭音によって、分けた。(後続字頭音は、当該字の呉音のそれを探り、本資料当該例の声点によって清濁を判定した。当該例に声点が存しない場合、本資料中の当該字声点加声例のものに依拠した。)

表1

a 「急」<sup>キツ</sup>の入声点

声点 下接字頭音	舌内 t		唇内 p		喉内 k	
	濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急
無声	13	24	19	9	2	53
有声	9	27	0	0	0	1
句末	8	20	0	0	0	1

b 「緩」<sup>ユル</sup>の入声点

声点 下接字頭音	舌内 t		唇内 p		喉内 k	
	濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩
無声	0	5	6	7	11	36
有声	0	6	11	10	18	37
句末	0	0	9	8	28	15

右のごとく、西本願寺蔵『観無量寿経註・阿弥陀経註』における、「急」の声点は、舌内入声字(ㄱ, または、無声音が続き促音化の可能性がある入声字に加声されている。

一方、「緩」の声点は、下接字の頭音にかかわらず、唇内・喉内入声字(ㄹ, ㄴ)に対して加声されている。

a 「急」<sup>キツ</sup>の入声点における例外は、有声音が続く例、および、句末例で「急」の声点が加声された、喉内入声字「逼」の一字二例である。

〔逼〕所逼<sup>入急</sup>云何<sup>上通</sup>當見<sup>入急</sup>（觀一三五）此人苦逼<sup>入急</sup>（觀五九六）

右が「逼」への声点加點例のすべてである。

坂東本『教行信証』においても、「逼」には「緩」の声点加點例しかない。

〔逼〕逼<sup>入急</sup>惱ス<sup>入急</sup>（二一五・六）

「ヒチ」の仮名音注が加點されていることから、「逼」は、舌内入声字と理解されていたものと考えられる<sup>10</sup>。

b「緩」の入声点における例外は、舌内入声字でありながら「緩」の声点が加點された、次の十一例である。

〔二〕一<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>例<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>寶像<sup>入急</sup>第十一<sup>入急</sup>觀<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>佛<sup>入急</sup>

急濁<sup>入急</sup>說<sup>入急</sup>無<sup>入急</sup>量<sup>入急</sup>壽<sup>入急</sup>觀<sup>入急</sup>經<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>卷<sup>入急</sup>

〔目〕日<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>沒<sup>入急</sup>

〔七〕第七<sup>入急</sup>觀<sup>入急</sup>經<sup>入急</sup>七<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>

〔八〕第八<sup>入急</sup>觀<sup>入急</sup>

右のうち、「一・日」は、坂東本『教行信証』においても、次の「緩」声点加點例が見られる。

〔二〕一<sup>入急</sup>時<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>異<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>之言<sup>入急</sup>第一<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>

緩<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>百<sup>入急</sup>五<sup>入急</sup>十<sup>入急</sup>年<sup>入急</sup>

〔目〕日<sup>入急</sup>一<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>今<sup>入急</sup>日<sup>入急</sup>

右のような語の中では、当時、これらの舌内入声音が開音節化したことが有ったものと思われる。

## ② 専修寺蔵『入出二門偈頌』の入声点

右と同様に、専修寺蔵『入出二門偈頌』の入声点を整理した結

果を、表2として次に掲げる。

表2

a「急」<sup>キフ</sup>の入声点

声点 下接字頭音	舌内 t		唇内 p		喉内 k	
	濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急
無声	23	7	3	1	3	2
有声	15	3	0	0	2	0
句末	3	2	0	0	1	1

b「緩」<sup>ユル</sup>の入声点

声点 下接字頭音	舌内 t		唇内 p		喉内 k	
	濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩
無声	0	5	9	0	19	5
有声	5	9	15	4	39	5
句末	0	1	4	0	11	1

専修寺蔵『入出二門偈頌』は、西本願寺蔵『觀無量壽經註・阿彌陀經註』と比較して全体の文量が少ないため、入声点の総数も少ない。

それ故、例が得られない欄が存するものの、「急」の声点は、舌内入声字、または、無声音が続き促音化の可能性がある入声字に加點され、「緩」の声点は、下接字の頭音にかかわりなく、唇内・喉内入声字に対して加點されるという、西本願寺蔵『觀無量壽經註・阿彌陀經註』声点と同じ原則が認められる。

しかし、総数が少ないにも拘わらず、西本願寺蔵『觀無量壽經註・阿彌陀經註』と比べて、本資料には例外が多い。

a「急」<sup>キフ</sup>の入声点における例外は、有声音が続く喉内入声字「亦」

「力」、および、句末で「急」の声点が加点了喉内入声字「徳」の、計四例である。

〔亦〕此論亦曰往平生論（一ウ1）

〔力〕一入急者業力（二オ3）

〔徳〕斯示安養之上至徳（二オ2）

修多羅眞實功德（一ウ2）

このような例は、西本願寺蔵『観無量壽経註・阿弥陀経註』には、舌内入声字と認識されていた「逼」を除き、見られなかった。  
b「緩」の入声点における例外は、舌内入声字でありながら「緩」の声点が加点了、次の二十例である。

〔一〕今无一之殊異（192.2） 猶如溜湮一味也（192.3）

即是名入第一門（194.1）

〔實〕一小淳心名如實（202.5） 如實修行相應者（199.5）

欲如實修相應故194.3

〔佛〕阿彌陀佛正偏知（193.4） 泥中生佛正覺華（200.5）

是以諸佛勸淨土（202.4） 佛而言宜言利他（199.3）

念佛成佛是真宗（203.4） 由佛願力獲攝取（204.5）

无尋光佛因地時（198.2） 念佛成佛是真宗（203.4）

釋迦諸佛是真實（204.3） 隨順名義稱佛名（194.2）

當知今將談佛力（199.4）

〔別〕同一念佛无別道（192.3）

〔薩〕菩薩已成智慧心（198.3） 婆藪槃豆菩薩論（199.2）

右のうち、「一」は、西本願寺蔵『観無量壽経註・阿弥陀経註』にも「緩」声点加點例が存した。また、「實・佛・別」は、坂東本『教行信証』にも、「緩」声点加點例が見られる。坂東本『教

行信証』においては、他に「日・逸・活・決・忽・術・述・奪・脱・伐・劣・闔」に「緩」声点加點例が存する。

しかし、「薩」に、「緩」声点加點例は無い。

よって、本資料の「薩」への緩声点加點例は、移点の際の誤りの可能性が高い。

その他、専修寺蔵『入出二門偈頌』には、入声点または入声字への声点に、左の不審例が存する。

ア・非入声字に入声点を加点了例

大集經言我末法（7オ3）

イ・入声字に入声以外の声点を加点了例

大集經言我末法（7オ3）

右両例は、直上直下の例であり、移点の際、位置の取違が有ったのではないかと推測される。

#### 四、結論

以上、高田本山専修寺蔵真佛筆『入出二門偈頌』建長八年写本について、訓点を中心に検討してきた。

本稿では、朱筆の訓点について次のことを述べた。

1. 朱筆の仮名は、親鸞自筆と言われる巻末「入出二門」の書き込みと朱色が異なり、声点の色に近い。

2. 朱筆の声点は、親鸞使用の声点形式に近い。しかし、細かな点で相違が存する。

3. 朱声点は、親鸞加點声点の内容に近い。しかし、移点の際の誤りと判断される点が存する。

右が認められるとすると、真佛筆『入出二門偈頌』の訓点は、墨点も朱点も、親鸞加点の底本を真佛が丁寧に移点したもの、ということになる。したがって、結果的にはすべて、従来の説を追認したに過ぎない。

しかし、朱仮名の字形および声点の形式・内容から、根拠を持つて先学の説を支持できた。

真佛が親鸞自筆本に基づいて本文を書写し訓点を加点したのは、建長八年（一二五六）親鸞八十四歳の年である。この書写は、親鸞の指示または真佛の懇望によるものであったであろう。いずれの場合であっても、真佛書写の底本である親鸞書写本の完成は、建長八年を大きく遡る時ではなかったであろう。

そうであれば、専修寺蔵真佛筆『入出二門偈頌』に移点された声点は、字音直読における、親鸞晚年八十四歳頃の漢字声調・清濁を伝える貴重な資料となる。

ただし、字音直読とはいえ、七字一句の「偈頌」である点で、四字で多く切る経文読誦声調を示した『観無量壽経註・阿弥陀経註』声点と、同列には比較できないであろう。

本資料は、これらの点を考慮し、親鸞の偈頌声調を知る言語資料として、今後活用されるべきものである。

## 注

(1) 格別のお計らいを頂いた常磐井鸞猷法主・平松令三先生・新光晴主幹はじめ、専修寺の皆様は、心より御礼申しあげます。

(2) 梅林久高「入出二門偈頌の諸本と聖人の新訳採用」（『高田学報』

第七十七輯、一九八八年十二月）。また、この「高田学報」第七十七輯は、「真佛上人筆 入出二門偈頌（卷末） 高田山蔵（梅林論文参照）」として、『入出二門偈頌』卷末カラー写真一葉を、巻頭に掲げている。これ以前は、高田山蔵『入出二門偈頌』は、親鸞筆と信じられていた。『影印高田古典』第一巻の新光晴解説も指摘するとおり、本文は親鸞書写本に依っており、親鸞が使用した漢字の字体を踏襲しているためである。

(3) 親鸞が「支」と「友」とを交替させる場合が有ったことが、『影印高田古典』第四巻解説五三九頁に、指摘されている。

しかし、親鸞の「友」は、「支」と字形に近いものの、両字は明らかに異なる。

今、『教行信証』から例を挙げれば、次の通りである。（『親鸞聖人真蹟集成』第一巻・第二巻通しの頁数と行数とで所在を示す。）

「友」―親友（一六四三）・我友（六四八五）<sup>トモニ</sup>・親友（二四四四・二五三三）・善友（一六五二・一八八六・二八五九・二八六二）・惡友（一八六七・二六四四）・友謙[支謙を友謙に訂正]（二三九八）  
・友謙<sup>ウケン</sup>（四〇四三）

「支」―辟支（四二二・四五七・四〇八二・四三二三・四五八二・四五九一七）・毘離支迦（六〇四二）・毘利支迦（六〇四四）・支提國（六〇五六）・韋陀支那祀典（六六八一）

したがって、親鸞は、『大阿弥陀経』の訳者を「友謙」だと認識していたものである。

(4) 新光晴「入出二門偈頌」（『影印高田古典』第一巻解説）も、「本文とは異なる筆跡である。」とする。



(5) 直話による。

(6) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月)、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月)後、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)付論第二章に改稿所収)、佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』の漢字音について」(比治山大学現代文化学部紀要)創刊号、一九九五年三月)、参照。

(7) 『親鸞聖人真蹟集成』等の複製本、参照。詳しくは、別稿を準備中である。

(8) なお、親鸞が『皇太子聖徳奉讃』に声点を加点するならば、それは、国宝本『三帖和讃』と同じく、「●」と「ー」の形式であつたはずである。事実、『親鸞聖人真蹟集成』第九卷所収の『皇太子聖徳奉讃』断簡には、「●」と「ー」形式の声点が加点されている。また、直弟本『西方指南抄』には、声点も親鸞の形をまねて書いたものも散在する。なお、直弟本『西方指南抄』下末に見られる顕智の声点も、円を一筆で書いたものである。

(9) 詳しくは、佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』の漢字音について」(『比治山大学現代文化学部紀要』創刊号、一九九五年三月)を御覧頂きたい。ここには、『増補親鸞聖人真蹟集成 第七卷』(二〇〇六年、法蔵館)の朱筆によって補訂した結果を、掲げる。

(10) 当時の音義・他訓点資料においても同様である。

(11) ただし、「徳號」(二・62.6)の例は、墨声点が二つ目声点を補い、緩声点としている。